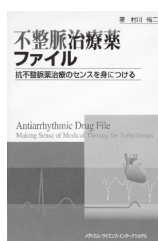


書評

[評者]

熊谷浩一郎

福岡山王病院ハートリズム
センターセンター長、国際
医療福祉大大学院教授



不整脈治療薬ファイル

抗不整脈薬治療のセンスを身につける

村川裕二 著

A5変形 頁214 2010年

定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-89592-649-2] MEDSi 刊

本書は2002年に発行された「循環器治療薬ファイル—薬物治療のセンスを身につける」の不整脈治療薬版として執筆された。著者の専門である不整脈について、診療に必要な病態生理・薬理の知識を、実際に臨床で役立てられる範囲の必要最低限に絞って、著者のセンスでわかりやすくユーモアを交えて解説している。

数ある薬の中で、抗不整脈薬は最も使用が難しく恐ろしい薬の一つである。本来は不整脈を抑える薬だが、効きすぎると逆に新たな不整脈を引き起こすという両刃の剣のような作用をもっている。病気を治す薬が、その病気を増悪させるような薬はあまりない。場合によっては、かえって予後を悪化させることもある。ほとんどの抗不整脈薬の副作用の欄には、洞停止、心停止、心室細動、心室頻拍、心不全、房室ブロック、失神、心原性ショック等が記載されてある。要するにこの薬を飲むと死ぬことがあるということである。また、なかには劇薬・毒薬指定もある。こんな恐ろしい薬はなるべくなら出たくないと思うかもしれない。

しかし、上手に使えば患者の苦痛をとることができ、

感謝もされる。確かに、素人には手を出しにくい薬であるが、うまく使いこなせばプロフェッショナルでかっこいい。高血圧にはARB、高脂血症にはスタチンさえやっておけばいい。簡単である。しかし、不整脈はそう単純にはいかない。まず、投与すべきか、あるいは投与しなくていいのかを見極めなければいけないし、不整脈の種類や心・腎・肝機能に応じて薬を選択しなければならない。馬鹿の一つ覚えで某Ic群抗不整脈薬を心筋梗塞後の心室性期外収縮、心房粗動、慢性心房細動、心不全合併例等に投与している諸君、大きな過ちを犯す前にこの本を読むことを勧める。

心電図や不整脈というと、難しそうでとっつきにくいと敬遠されがちだが、本書にはほとんど心電図がでてこないし、ポイントを押さえてあるからわかりやすい。本書はレジデントの必読・必携の書であると同時に一般内科医には知識の整理・更新に大いに役立つはずである。是非、著者のセンスを身につけたいものである。